

【報告】

現代社会の批評機能をもつ博物館活動の試み
—野田市郷土博物館の「私のコレクション」展—

An Attempt of the Museum Operation to
commene the Modern Society
—The Exhibition “My Collection” at Noda City Museum—

金 山 喜 昭*
Yoshiaki KANAYAMA

はじめに

“博物館が社会の批評機能をもつ”という発想は、東京大学社会情報研究所の吉見俊哉の見解⁽¹⁾によるものである。私には現代博物館の機能を考えていくうえで、この言葉は刺激的なテーマとなっている。

地域に設立された人文系の地域博物館では、一般に「過去」を主題にすることが多く、「現在」や「将来」について話題にすることはあまりない。大学の授業で学生にレポートを書かせてみると、「博物館の展示や活動が過去にベクトルがむけられるばかりで、現代や将来が全く見えてこない」という意見が目立つ。近年、博物館の入館者が減少傾向である。その一因は博物館サイドが、「現代」的な視座を避けていることや、来館者が魅力や発見などを感じることが少ないためかもしれない。そのような思いを抱きながら、最近、野田市郷土博物館では「私のコレクション」展（1998年8月11日～9月13日）を実施した（写真1・2）。

1. 展覧会の社会的背景

最近、「おたから」という言葉が流行している。テレビなどのマスコミで骨董品や美術品、限定販売品などが、「おたから」として登場して、値踏みがされる。予想外に高額であれば、会場の人々は興奮する一方、低額であれば本人は落胆するが、他人はかえ

って面白い。そんな光景を自宅で目にするうちに、いつの間にか自分もその空間にはまり込んでいたりする。

以前は、展示室で来館者に接していると、たまにこのような質問をされることがあった。その人は、（展示資料を指さして）「これはいくらぐらいするのですか？」という。その時はきまって返事に困りながら、文化財は国民共有の財産であること、あるいは歴史研究の資料として価値があるもので貨幣価値には換算できないことを説明した。それでもなお食い下がる人には、言葉を濁しながらも小声で話したものである。しかし、最近はそんな質問をする人はみられなくなった。なぜならば、この頃は、マスコミにより、文化財や歴史資料などはすべて貨幣価値に換算されることが社会的に知れわたってしまったからである。これは、情報公開という意味では、それなりの意味があるかもしれないが、私にはむしろ弊害の方が大きいのではないと思われる。

それは、情報としてそのことを受け入れる人が、適切にその意味を理解していれば問題はないが、おうおうにしてそうではないことの方が多い。例えば、ある家でこれまで先祖代々にわたり大切に受け継がれてきたものがあるとする。ところが、提供者が期待していた値段より安く評価されると、処分してもいいということを言い出す。それまで家宝とされき

*野田市郷土博物館館長補佐

平成11年7月2日受理

たもの、人々の思いが込められてきたものであっても、貨幣価値がなければ平気で捨ててしまう。その家にとっての文化や伝統が貨幣価値にすりかえられていく。ここに日本人の心の変化というか、風化現象をみる思いがする。

あるいは、最近では、これまでになかった信じられないような盗難事件が続発している。野田とその近辺では、神社仏閣や道端の石造物が被害にあっている。野田のある神社では、社殿の周囲にはめ込まれていた江戸後期の木彫が10枚ほどが剥ぎとられた。中国の子供の「唐子遊び」などの図柄のもので、縦80センチ、横1メートルほどのもの。別の神社では本殿の正面に組み込まれた竜の木彫が、根元からノコギリで切り取られたり、また獅子の彫刻なども盗まれた。さらに、全国的にも有名な茨城県岩井市の国王神社に伝わる平将門像が、境内の収蔵庫の鍵が壊されて持ち去られたというショッキングな事件まで発生した。

野田の事件については、さいわいにも警察の捜査により容疑者は検挙された。犯行の動機について、新聞は、「遊びの金ほしさに盗んだ。お宝ブームで、彫刻を売りさばけば、古美術商が買い取ってくれると思った」⁽²⁾と、容疑者が供述していることを報じている。事件が解決して一件落ち着いたものの、何とも後味が悪いものを感じる。

それでは、このような社会的状況において、博物館は何をなすべきだろうか、あるいは何をすることができるのだろうか。戦後の博物館学研究のなかで、博物館は「もの」の価値を創造する場であることがいわれてきた⁽³⁾。その対極に位置するものが、貨幣価値の高い品物であることはいうまでもない。

そこで、あらゆる品物に値段がつけられる中で、値段がつきそうもない日常的なコレクションに注目することにした。それは、所有者がプレミアがつくことを意識せずに、日常生活のなかで楽しみながら少しずつ収集しているものである。かつて、民俗学者の宮本常一が海の博物館館長の石原義剛氏に述べたように、「同じものがいくらあってもいいし、どんなものでもいい、良し悪しなんか考えずとにかく黙って5万点を集めなさい。集めたら何かが見えて来ますよ」⁽⁴⁾という発想は、コレクションの真髄だろうと思う。博物館建設とは、もちろんスケールの

違う話ではあるが、私は個人コレクションの真髄を紹介することにより、現代人が忘れかけている「もの」の価値を見出すために、「私のコレクション」展を企画した。

2. 「私のコレクション」展の開催

コレクションは野田市内の住民に公募したところ、期間中に13件の応募があった。募集内容は、「原則的に高い値段で購入したもの（古美術品や絵画など）ではなく、日常生活のなかで長年にわたり集めてきたものを対象とします」というもの。こちらの意図をなるべく分かりやすく表現したつもりであったが、いずれの応募者も、「こんなものでもよろしいんでしょうか?」というように、応募というよりも、問い合わせがあった。ぜひ私のものを展示して欲しいという誇らしげな人はいなかった。しかし、これがかえって良い結果を導いたようで、問い合わせのあったものは、いづれも興味深いものであった。

展示会場の開催挨拶パネルには、次のような展示会の趣旨を述べた。

ここに並んでいるのは、市民の方からご提供いただいた個人的なコレクションの数々です。高額の貨幣で取引される「もの」ではありませんが、コレクターたちにとっては、数々の思いが込められた、お金に換えられない大切な品々です。どんな「もの」を「宝」とするかによって、その人が何を大切にするかという価値観がわかります。そこにはその人が生きた風土、その人の人生が反映されていることでしょう。博物館は「もの」の価値を再発見する場です。貴方にとっての「宝」とは何か、もう一度考えてみてはいかがでしょうか。

展示品は住民から提供されたコレクションと、コレクションの経緯やその思いなどを、私が聞き取りをしてまとめたことをパネルにして紹介した。展示品とコレクターの言葉は次の通りである。

真空管（写真3）

川鍋幹男さん（昭和17年生まれ）

真空管は、電波をキャッチして音声信号に直してスピーカに与えて音を出すもので、ICやトランジスタの前身となる音響部品です。子供の頃から

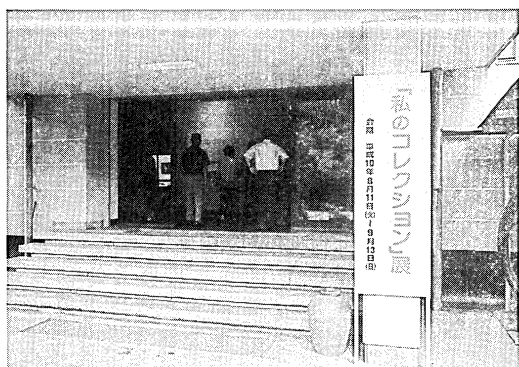


写真1 展覧会の会場

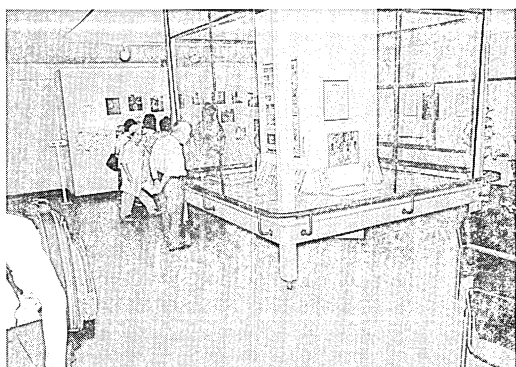


写真2 展覧会の会場

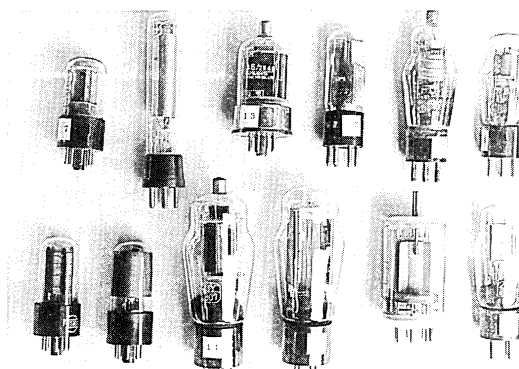


写真3 真空管

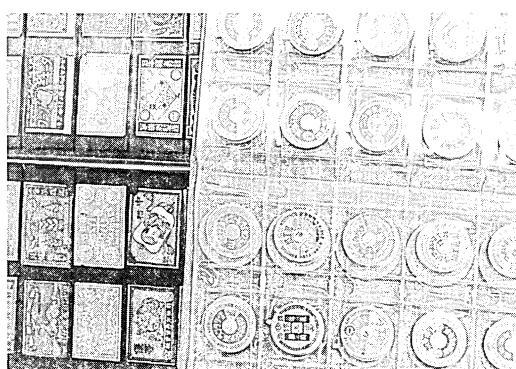


写真4 牛乳ビンのふたと明治・大正のマッチ箱

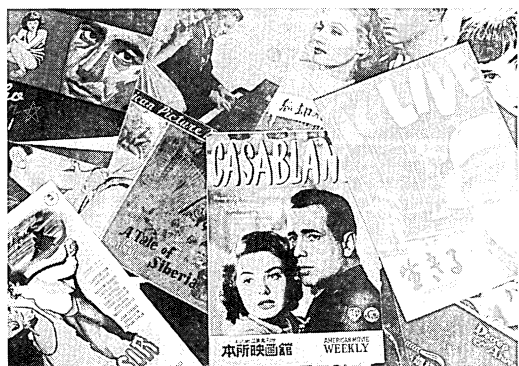


写真5 映画のパンフレット

ラジオを作ったり分解しながら音響機器に親しみ、昭和34年頃からアマチュア無線などもはじめ、現在は無線業務の仕事についています。真空管は約600本ほどコレクションしていますが、すべて私の思い出のものです。その一部をご紹介します。

牛乳ビンのふたと明治・大正のマッチ箱 (写真4)

山崎健市さん (昭和32年生まれ)

牛乳ビンのふたは10年ほど前から集めました。おそらくコレクターはいないだろうと思い始めました。関東や関西のものが多く、同じ銘柄でも工場が異なるとひと味違うものです。自分で飲んだものや、店先で拾ったりして集めました。マッチ箱は明治・大正時代のもので、当時は広告目的ではなく、販売用のマッチです。明治のものは輸出用ですが、マッチからも時代性を知ることができます。

映画のパンフレット (写真5)

万崎健一さん (昭和7年生まれ)

子供の頃から映画が好きで、学生時代には週に2～3本見ていました。その頃は、東京に住んでいましたので、有楽町、日比谷、新宿などの映画館によく通いました。パンフレットは、昭和25年頃までは無料で配付していましたが、その後有償になり、次第に豪華になってきました。戦前のも



写真6 ダルマ



写真8 旅の思い出

のは、全て戦災で焼けてしまい、コレクションは全て戦後のものですが、500部ほどにのぼります。

ダルマ (写真6)

鈴木昭夫さん (昭和17年生まれ)
学生時代から旅行するたびに郷土玩具を集めるようになりました。土鈴、張り子などがありますが、そのうちダルマをご紹介します。ダルマには10年程前から魅力を感じるようになりました。ダルマといえば、怖いイメージがありますが、私はダルマがもつ「おおらかさ」が好きです。この頃は自分でも絵筆をとり、石や色紙、扇子などにオリジナルのダルマを描いて仕事に役立てています。

ペーゴマ (写真7)

新井敏之さん (昭和15年生まれ)
これらは、私が子供の頃に遊んだものです。残っていたものでも100点ほどになります。ペーゴマは相手のコマをはじき飛ばした方が勝ちとなり、それを自分のものにすることができます。そのため



写真7 ペーゴマ



写真9 メンコ

飛ばされないように、ヤスリで削って重心を低くしたり、コマの上面にアスファルトを詰めて重くするなどの工夫をしました。ここにあるものは当時の友達から得たもので思い出のものばかりです。

旅の思い出 (写真8)

小宮山清さん (大正15年生まれ)
私は旅行が好きなので、それに関するものをいろいろ集めています。その一例がここにご紹介するものです。各県ごとにありますが、千葉県分として整理しました。観光施設などの入場券の中には、既になくなってしまった所もあります。記念乗車券は昭和34年頃から集めたものの一部です。七福神めぐりは昭和60年から始めました。場所によっては七福神の色紙を置いていない所がありますのでこちらで用意して出向きました。

メンコ (写真9)

野中健一さん (昭和20年生まれ)
子供の頃、メンコやチャンバラ遊びが好きでした。



写真10 芭蕉の銅像写真

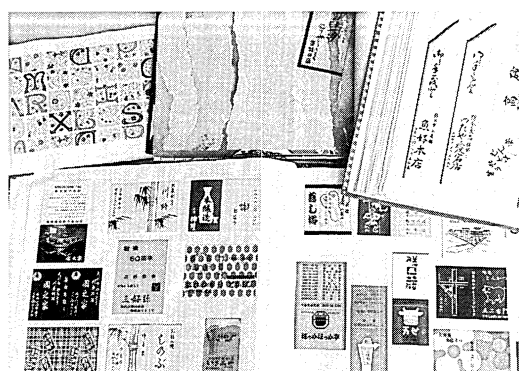


写真11 包装紙・マッチ・おてもと



写真12 日本酒の王冠とラベル

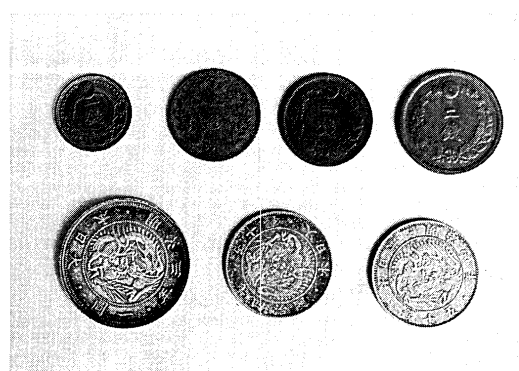


写真13 明治時代の古銭

20才を過ぎる頃になると、急に当時の遊びが恋しくなり、メンコなどを集めるようになりました。一つつつのメンコはたくさんありますが、裁断する前のは珍しいのでどうぞご覧ください。あるいは丸いメンコもありました。中央小学校校門の前の空地には、紙芝居が来たり、近くの駄菓子屋では当たりクジを全部ひいてしまったこともありました。

芭蕉の銅像写真（写真10）

中村滋男さん（昭和8年生まれ）

私は芭蕉が訪ねた奥の細道を旅しながら、芭蕉像をカメラにおさめています。私にとって奥の細道は人生の原点かもしれません。小学5年の時、疎開先で詠んだ俳句は「五月雨に打たれ散りゆく梅の花」というもの。新制高校2年の夏休みの宿題には奥の細道が出されて苦労してまどめました。青年期には山旅が好きになりました。芭蕉像をまとめる着想もそんな流れの一環だと思います。

包装紙・マッチ・おてもと（写真11）

渡野辺武夫さん（大正2年生まれ）

私は趣味で絵を描くのが好きです。美人画や風景画などを主に描きます。包装紙や銘菓意匠などは美人画の着物の絵柄を描く際に参考にすることがあります。この美人画はその一例です。マッチやおてもとなどもたくさん集めていますが、それらは全て昭和30年代からのものです。ある程度たまると、ありあわせの材料でアルバムを作り整理します。その一部をご紹介します。

日本酒の王冠とラベル（写真12）

（幻の吟醸酒を飲む会代表 飯塚均さん／昭和16年生まれ）

私達の会は、15年前に結成しました。日本酒を通じて食文化を語ることを目的にしています。当初、4人のメンバーが、今では24人になりました。これまで、メンバーが全国から調達して飲んだ吟醸酒は1000銘柄以上に及びます。いずれも思い出のあるものばかりです。結成10周年には、会として「初桜」

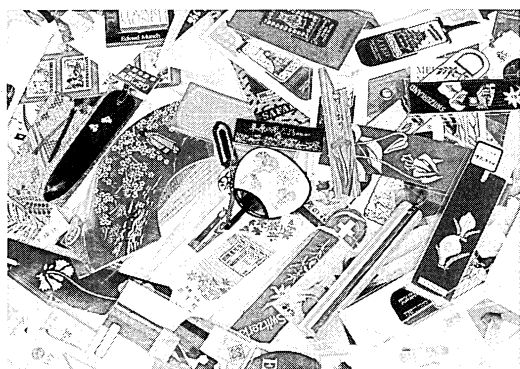


写真14 葉

という吟醸酒をつくったり、平成6年には幻の日本酒を飲む会の全国大会を野田で行ないました。

明治時代の古銭 (写真13)

宮尾典子さん (昭和3年生まれ)

これらの古銭は、私の母親の忘れ形見です。長野県出身の母 (明治33年生まれ) が大正13年に結婚する際に、祖母が母親にこの古銭をもたせました。その後、母は記念品として大事にしまっておりましたが、その母も昭和59年に亡くなり、今では我が家の大切な宝物です。古銭は、いずれも明治時代のもので、1円、50銭、2銭、1銭硬貨など7枚です。

葉 (写真14)

柄沢清水子さん (昭和19年生まれ)

いつのまにか葉がこんなにたくさん集まってしまいました。10年前から、夫や友人などがお土産に買って来てくれたことから集まりだしました。日本各地のものばかりでなく、海外のものもあります。葉からそれぞれの土地柄をうかがうこともできて楽しいものです。最近では、以前ほど旅先であまり葉を見かけなくなりました。これも時代の移り変わりなのでしょうか、少し寂しい気がします。

タバコのパッケージ (写真15)

谷 良材さん (昭和6年生まれ)

若い頃からタバコ好きで、パッケージのデザインが異なるものを楽しみながら吸っていました。仕事や旅行などで訪れた国内や世界各地で求めたものは約500種類にのぼります。それらを捨てずに保管していたところ、7～8年前にパッケージに書



写真15 タバコのパッケージ

かれている警告表示の研究家の方に所望されたことからお役に立てば良いと思い寄贈しました。これらは重複していたものの残りのものです。

会期中の入館者は2,566人。そのうち88人の来館者がアンケートに回答してくれた。展覧会の成果については、来館者の感想 (原文) をまじえながらみることにする。

まずは、自分も出品したかったという人がいた。「私はシールをたくさん集めているので、これに出したいな—と思いました」(女子/12才) という素直な気持ちを示す小学生。「とても懐かしくてよかった。どれもいつか見たような、やったような通りすぎた少年の時を思い出した」(男性/58才) というように懐古的になる人もいた。あるいは、「我が家でも引っ越しする時、映画のプロマイドがみかん箱一杯あったのですが、今の所へ越して来てじゃまなのでみんな燃やしてしまったのが残念でした」(女性/77才) というように、後悔したり自己反省する人もいる。「すばらしい企画だと思います。こうしたものを残していってほしいです」(男性/23才)、「敬意を表します。そしてこれらのコレクションはこれからどうなるのでしょうか。売られたり、なくなったり消滅したりしないように心してください」(男性/71才) というコレクションの所有者への要望もある。

そして、最大の関心事は、展覧会の目的や意図がどのように受け取られたのかということである。それについては、次のような感想から理解することができる。「ベーゴマも一つずつ個性があって良かったです」(男性/22才)、「何年も何年も集めるとすごいものになるんだなぁと感心しました」(女性/23才)、

「こんなコレクション展は初めてです。楽しい企画を有り難うございました」(女性/50才)、「ダルマ、旅の思い出、芭蕉の銅像写真などを興味深く拝見しました。ご本人にとっては、お金には換算できない数々の思いがそれらのひとつひとつに秘められていて、本当の意味での宝物であると思います」(女性/50才)、「新しい時代を決して否とはいたしませんが、戦中、戦後を生き抜いてきた世代の私たち、やはり考えさせられることがあります」(男性/70才)など。必ずしも全ての意向が来館者に伝わらなくても、このように多少なりとも来館者が発見したり、感じたり、再考する契機につながれば、今回の企画はそれなりに評価できると思う。

3. 体験講座“ペーゴマをまわしてみよう”の開催

この体験講座は、展覧会の会期中に、展示しているペーゴマを実際にまわすもの。また、新しいペーゴマを購入して、参加者に配付して、各自でペーゴマをまわしてみようというものである。8月26日に博物館の敷地で行われた。参加者は、親子づれ、学生など37人。

そもそもこの企画は、ペーゴマを提供してくれた新井氏からの聞き取り調査で、昭和20年代の子供たちがペーゴマという一つの遊びにおいても苦心しながら真剣に取り組んでいたことを知り、我ながら感動したためである。子供たちは、駄菓子屋で買ってきたペーゴマが負けないように根気良く加工をした。ペーゴマ遊びは、遊びといっても子どもにとっては一種の勝負のようなものであった。野田では醤油の空き樽にシートをはり、その上に回転させたペーゴマを投げ入れていき、相手のコマをはじき飛ばした者が勝者となる。はじき飛ばしたコマは勝者のものになる。それだから、子供たちは日頃勝つためのコマづくりに余念がなかった。コマの重心を少しでも低くできれば相手のコマの下に侵入してはじき飛ばすことができる。そのためにヤスリで研いだり、重さを増すためにアスファルトをどこからか入手してコマの上面に詰め込んだりしたという。そこで、現代の子どもにも、そのような体験の機会を提供してみたいと思ったのである。

体験講座では、館長が実際にペーゴマをまわしたり、参加者に指導をしたところ、最初は回せなかつ



写真16 ペーゴマをまわす子供たち



写真17 ペーゴマをヤスリで加工する子供たち

た子どもも講座が修了するところには上手くなった(写真16)。あるいは、ヤスリでコマを加工する場を用意したところ、子ども同志で工夫しながら加工する光景も見られた(写真17)。講座は2時間であったが、またたく間に経過してしまった。

4. 現代社会の批評機能をもつ博物館とは

それにしても、なぜこれほどまでに、私たちの身の回りのものに高値が付けられ、もてはやされるようになったのだろうか。こうした動向は、ここ3～4年のうちに顕著になってきた。それ以前は、一部のマニア仲間で「遊び」感覚で通用してきたことが、マスコミの流れにのることによって、一挙に「お宝

ブーム」という社会現象になってしまったのである。

その背景については、京都大学大学院人間・環境学科の佐伯啓思による情報化社会に対する見解⁽⁵⁾が参考となる。佐伯は、情報化社会を単に情報機器の普及や効率化、合理化により社会環境が整備されるというようにバラ色化したものとはみていない。それは、近代社会を築き上げた物質的生産と消費に価値をもつ産業文明が衰退化する一方で、これまで市場の外におかれていた情報やソフト化が、市場の領域に取り込まれることで、それらが商品としての「モノ」になっていく。物質にかわり情報に価値がおかれるようになる。ここで重要なことは、情報やサービスは本来的に「経済」分野のものではなく、「政治」「文化」の領域に属するもの。それが「経済」と融合することになれば、有形財や無形財を問わず、芸術、科学、教育、宗教などのあらゆる分野が市場化されることになる。これまで「経済」がかかげてきた生産効率をあげる「経済至上主義」は通用せず、「純粋な経済」が破壊されることになる。したがって、佐伯は、「その意味では、市場や産業のかつてない拡張と展開が生じているのである。とすれば、現代社会を高度産業社会あるいは高度市場社会と呼んでもさしつかなかろう」といい、情報化社会を高度産業社会や高度市場社会ともいい換えている。そして、この変質は、従来の生活や価値観に影響を与えることになるのである。

このような見解を踏まえると、「お宝ブーム」という社会現象を理解することができる。つまり、それまでの「趣味の世界」が市場に取り込まれてしまったということである。趣味として集めてきた、例えばマンガ本、玩具、切手、コイン、美術品などは、たとえ中には値が付いたものがあったとしても、そのことはあえて表面には出ずに隠されていた、そこにスリルがあり、面白みや意外性が秘められていたのである。しかし、今日では、全てがマスコミという市場の場でせりにかけられ、貨幣価値が白日のもとにさらされる。それは、私たちが、これまでの「もの」に対する敬愛や愛着などの感性を剥奪する行為である。さらにいえば、「もの」離れを助長することにもつながる。

この展覧会は、コレクションの本質とは何かということを考えてみたつもりである。人間がものを集

める行為の最初の段階は、ここに紹介したような、好きで長年少しずつ集めたもので、人に誇示するような意識が働かず、本人や回りの人達が楽しめる程度の素朴なものである。しかし、その次の段階になると、コレクションを充実させるためにコレクターと交換したり購入したりするようになり、ひいては施設をつくって人に誇示したくなる。

この展覧会は、現代性の善悪問題を別にしても、時代の流れに逆らうような行為なのかもしれない。たとえ逆らってとしても無意味なことかもしれないことは分かっている。しかし、沈黙はその時代や文化に対して何よりも罪なことであることを認識することの方が大切ではないだろうか。そこで、最後に吉見が述べる“社会の批評機能をもつ博物館”についての見解を紹介して結びとする。

コンテキストをめぐる「問い」を含んだ展示、いわゆるモノを見せるのではなく、コンテキストまで含めた形での「問いかけ」として展示を行なっていくことができれば、それ自体として「社会に対する批評機能」をもち得る「場」になっていくのではないのでしょうか？

博物館が社会の批評機能をもつということは、これまでの博物館にみられない、博物館としての新しい社会的な役割の一つである。

(註)

- (1) 吉見俊哉 1997「“批評空間”としてのミュージアム」カルチペイト第6号、40～47 p。
- (2) 産経新聞（千葉版）1998.4.10朝刊。
- (3) 加藤有次 1977『博物館学序論』雄山閣出版 253 p。
- (4) 石原義剛 1997「(小林達雄対談) ミュージアムのリーダーたち」月刊ミュゼ VOL.26 4～7 p。
- (5) 佐伯啓思 1995『現代社会論（市場社会のイデオロギー）』講談社学術文庫 293 p。